

## 「一言芳談」のこと

中野孝次

わたしはいま「徒然草」を現代語に訳す仕事をしていて、これがなかなか面白い。「徒然草」にはわたしの好きな言葉がいくつもあり、そういう言葉はふだん道を歩いていても頭に浮び、口ずさむことがある。

若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ来にけるは、ありがたき不思議なり。(第百三十七段)

これもその一つで、若いと言わず、強健と言わず、いつやってくるかしないのが死ぬ時である。今日までそれを遁れて生きているのは思ひもかけぬ幸運だと言っている、というのが。実際そのとおりで、人は、自分が死ぬのはずっと先のことだ、当分死にはしないだろうから、生きているうち死のことなんて考えることはない、などととかく考えがちだが、それはとんだ間違いだ。死は誰にでもすぐそこにある。つねづねそれを考えないでいて、いざ死が近くなつてあわてふためくのは愚か者だ、ともいう。

されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に樂しまざらんや。(第九十三段)

死ということを決えず念頭に置くことによつて、今生きていることがありがたくなる。死を忘れている者は、この喜びを知らない、というのだ。これなど、生きているのが少しも楽しそうでない今の日本の若者に聞かせてやりたいような言葉だ。この「徒然草」の中に、「一言芳談」という書物のことが出てくる。この書物は、法然や、明遍をはじめ、中世の念仏行者三十四人の言葉を記したもので、内容は、人はつねに死の近きことを思つて、後世を救われようと念仏せよ、というものだが、これがなかなかいい。兼好は「徒然草」にその中の五つばかりを書きとめている。

後世を思はん者は、糠汰瓶一つも持つまじきことなり。持経、本尊に至るまで、よき物をもつ、よしなき事なり。

糠汰瓶というのは、糠味噌つぼのこと、真実救われようと願う者は糠味噌つぼ一つ持つてはいけない。お経の本でも、持仏でも、いいものを持つとうとするのはもつてのほかだ、というのだからきびしい。これは俊乗坊という人の言葉だが、こういう戒めは「一言芳談」のいたる所にある。

中でわたしは法然上人の、こんな言葉が好きだ。

法然上人云、「道心をばぬすみて発したるがよきなり」

「ぬすみて」とは、こつそりと人に知られぬように、という意味だ。麗々しく自分は今度念仏人となりましたなどと人にふれず、黙つて、自分の心の中で信を発するのがいい、というのだ。いかにも法然らしい、易しいが深い言葉だという気がする。「徒然草」には、法然上人のこんな言葉もせている。

或人、法然上人に、「念仏の時睡をかきされて、行を怠り侍る事いかがして、この障りを止め侍らん」と申しければ、「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。

兼好はこの話に「いと尊かりけり」と、最大級の讃辞を呈しているが、まことにいい、深い話だと思う。ふつうならば念仏唱えながら居眠りするとは何事か、信仰がうすいからそうなる、などと叱るところだが、それを「目が醒めたらまたやればいい」と、穏やかに、確信もつて言う、これは並大抵の人にできることではない。「一言芳談」に、法然のこんな言葉もある。

法然上人云、「念仏の義を深く云事は、還而浅事也。義はふかかずとも、欣求だにも深ば、一定往生してん」

念仏の意義とか学理とかをうるさくいうのは、かえつて信心が浅いのだ。それは頭学問にすぎない。意味などを考えず、ただ仰いで念仏するのが本當の信だ。そういう人は必ず往生できる、とうけあつたのだ。

こんな言葉にふれるのは、それだけでなにやらありがたい気がしてくる。ともかく、こと心とか救いとかいう事柄に関しては、昔の人の方ははるかに真剣で、考えも深かった。パソコンだのケータイだのでつまらぬ情報を得ていてはダメなのだ。

(作家)